

菅田哲也インタビュー

「人を幸せにする嘘」の物語

インタビュー・文／円堂都司昭

週刊誌を題材にした理由

——CMに登場した謎の美女をめぐる物語『Q r o sの女』（単行本は2013年刊行）が今月文庫化されます。この作品で週刊誌を題材にしたきっかけは。

菅田 警察もの、青春ものなど様々なタイプの作品を書いてきましたが、シリーズもの以外の主人公に関してどんな職業が面白いだろうと考えていた時、担当編集者から「以前は『FRIDAY』にいたんですよ」という話を聞きました。報道については『主よ、永遠の休息を』（2010年）で通信社の記者を主人公にしたことはありましたが、週刊誌記者を主人公にするのも面白いかもしれないと思いました。結果的にその編集者が担当から外れた後に『Q r o sの女』を書いたのですが、実際に週刊誌記者に会い、取材に関する取材をしました。週刊誌でも政治や生活など担当が分かれている、契約記者が政治班から芸能班に異動することもあるとか、聞くまでは週刊誌のシステムについてよくわかりませんでした。取材をするうちに興味が深まりました。

——『Q r o sの女』には、過去に失敗した経験のある先輩記者、政治分野から移ってまだ芸能に不慣れな記者、ブラック・ジャーナリスト、ネットで無責任な噂を流す人々など、情報発信者に様々なタイプが出てくるのが興味深かったです。

菅田 そこらへんは取材のたまもので、話を聞いた記者が「俺のことじゃないけれど」と前置きしてブラック・ジャーナリストのことを語ってくれました。記者にもいろんな人がいるのが面白かった。小説に出てくるほどの失敗ではないですが、ある女優の実家を訪れた記者は彼女についていい記事を書くつもりではなかった。裏取りで行っただけなのですが、お母さんはそれを知らないからお茶を出してくれて昔話もしてくれた。これはまずいんじゃないかと記者も思ったそうです。よくない記事を書いて女優が潰れたら後悔するだろうとか、いくつかのケースを聞くうちに、記者として立ってくる小説のキャラクターが何人か固まってきました。

——視点人物と構成が他の作品とは明らかに違いますが？

菅田 「姫川玲子」シリーズをはじめとする警察小説など僕のふだんのミステリー作品は、1章が5節立てになっていたら、いつも最初の1節だけ犯人視点になっています。残りの4節は例えば姫川玲子と誰かという風になっていて、次の章の第1節はまた犯人視点。そうすることが多い。一方、「武士道」シリーズの場合は、主人公の女の子二人の視点が順繰りに出てくる。それ以外の何か新しいやりかたはないかと考えていた時、『運命じゃない人』という映画がヒントになりました。

この映画は同じ出来事をいろいろな登場人物の視点で描き、真相に迫っていく展開が面白い。そうだ、視点人物が変わっていく話にしようと考えました。視点人物が変われば違う時間軸に移る。『Q r o sの女』にはそのように構造的な試み、企みが大きなものとしてありました。

印象に残ったCM美女

——『Q r o sの女』ではある女性のCM出演が物語の発端になりますが、菅田さんにとって特に記憶に残っているCMはありますか。

菅田 僕が覚えているのは、中谷美紀さんがデッキブラシを持って集団で踊っていた日本石油（現J Xエネルギー）のCMです（1994年）。今のアイドルグループでいうセンターの位置にいて、きれいな子だなと思いました。当時はそれが誰かなんてすぐにはわからなかった。でも、今は誰だかすぐにわかってしまう。ネットで検索すれば出てきますから。だから、いくら調べてもわからなかったら面白いのではないかと発想したんです。調べてもわからない状況がどうしたら成立するのか、逆算する形で『Q r o sの女』の内容を膨らませていきました。そこで思いついたのがきれいな女の子がパッと出てきて印象に残るCM。例えば、化粧品のCMは出演者一人のものが多いから、突発的にその子が出たという状況は作りにくい。どんなCMがいいかと考えていた頃、ユニクロか何か、いろんな人がとっかえひっかえ季節の服を着るCMがあって、こういう感じかなと思いました。

◆この続きは IN★POCKET 2016年9月号で！◆